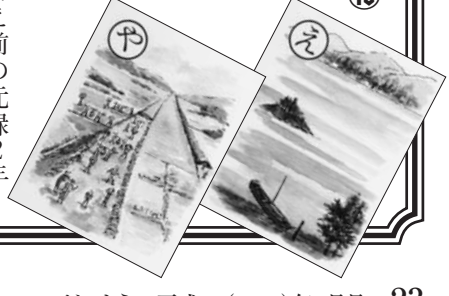
新 今昔物語 第22話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑩

「益軒の　みた深野池　今はなし」
「大和川　北から西に　付け替える」



江戸時代の中頃まで、大東市には深野池という池がありました。今から約6千年前の縄文時代に河内平野が海であった時の名残で、北は現在の寝屋川市河北から、南は東大阪市元町あたりまでの、南北約4.5キロメートル、東西約2キロメートルの大きさでした。本市では、深野、三箇、谷川、御供田、泉町、平野屋、南新田などの地域が含まれていました。

柏原から堺へ流れる現在の大和川は、江戸時代に新しく造られたもので、それまでは柏原から幾筋もの流れに分かれ河内平野を北上し、その一つである吉田川が深野池に流れ込んでいました。当時は長雨が続くと各所で堤防が決壊し、洪水の被害が絶えなかったため、川筋の農民たちは、川を西へ真っすぐ堺の方へ流すよう幕府に訴え続け、宝永元年（1704）に、ついに付け替え工事が行われたのでした。

深野池は翌年の宝永2年（1705）から開発が始まり、新田として生まれ変わりました。私たちはもうその姿を見ることはできませんが、付け替え前の元禄2年（1689）に、当地を旅した貝原益軒という学者がその著「南游紀行」の中で、池の様子を次のように記しています。

「池の広さは南北2里、東西1里で湖のようで、そこには島があり三箇という村がある。島には漁で暮らす家が七、八十戸あり、田畑もある。池にはコイ、フナ、ナマズ、ハスなど魚が多く、毎日魚を捕って大坂へ売りに行く。また、蓮やみずぶき、葦が多く生え、それを採って生活に用いている。特に菱が多く、その実を採って、飯や団子や粥にして食べ、また、売ったりもした。菱を採る日は決まっており、菱には税がかからなかった。」

この記述から、三箇はかつて深野池に浮かぶ島であったことが分かります。

今日の大東市の姿が形成されるのは、大和川の付け替え、深野池の開発以降のことといえるでしょう。

（生涯学習課）